

旧型だけど頑張る

月雲 一心

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日突然、旧型と言われる艦娘達よりさらに古い時代の駆逐艦と なってしまった。ぼっちは嫌だけど、妖精さんが可愛いから頑張れる 気がする。ツツコミどころ満載だけど、なっちゃんたものはしょうが ないので精一杯頑張りますかーと言ってたら、いつの間にやら生きる 伝説扱いされていたある艦娘のお話…

# 目次

## 序章

これなんて二次？

1

ここは無人島？

5

## 序章

これなんて二次？

「えーつと…つ!?」

目が覚めたら、浜辺で寝ていた。目の前は見渡す限りの大海原…

(何を言ってるかわからないと思うが (ry))

うん、思考するだけの余裕はあるようだ。

ゆっくり落ち着いて昨夜の事を思い出そうとしてみる。

テレビでニュース見ながら遅めの夕飯を取り、自室に戻ってPCを起動。艦これを立ち上げて遠征任務を回しつつWOWsという海戦ゲームをやって、いい時間にベッドに入って寝た。

(うん、確かにベッドに入って寝たんだよな。)

それなのに寝て起きたら砂浜とか…これなんて二次創作?と思つてると、不意にほっぺたをつつかれた。

「ひゃっ!?」

思わず奇声をあげてしまふと同時に、自分の声にびっくりした。

「誰かいる…?」

ツンツン…とまたつつかれる。

「もう…なに?」

と、目線を少し下げると肩の上に何かがあった。

二頭身でクリツとした目。セーラー服みたいな服に小さい帽子をちよこんと頭に乗せて…これって艦これの妖精さん?だよな?

「おはようございますー。おめざめですか?」

妖精さんが笑顔で挨拶してくれた。ニパツって擬音が聞こえてきそうだ。

「え?…もしかして妖精さん?」

「ごめいとうなのですー」

あれ?何かわからら出てきたよ?何処にいたの?

「われわれは、あなたのせんぞくなのですー」

「いろいろちがうのでしょうがないですねー」

「こんどはいいひとかなー」

「それはないしょのやくそく!!」

「いのちつきるまでおともするのがさだめー」

「してしかばねりあにめいと!!」

「「ぎやぎつ」」

あ、最後の子が他の子達に押し潰された。

「ふふっ…」

あまりの可愛さと微笑ましさに、思わず笑みがこぼれる。うん、間違いない…まさかのまさか…艦これ世界に転生しちゃいました。

いやね、二次創作は好きですよ？そりやあもう、色んなサイト回って片っ端から読み漁るくらいにはね。

でも自分がそうなっちゃうなんて、誰が想像できますか。読者さんだって、きつとこんなこと想像して無いですよ。

「「メタいの、ダメー、ぜったい!!」」

「フアツ!？」

知らない内に声に出てたらしく、私の周りでキャツキャしていた妖精さん達がこつちを向くと、一斉にツツコむ。その姿が余りにも可愛かったので思わず苦笑してしまう。

「そういえば、ここは何処なの?」

「「しまですー」」

「いやあの、そうじゃなくてね…」

「げんざいいちはわれわれにもわからないのですー」

えー、マジですか?今日のご飯から自力で調達しろって事ですか? そういや艦娘に食事って必要なのだろうか…その辺は、妖精さんに聞いてみようっと。

ー中略ー

ええ、ひとつ質問する度に妖精さん全員でボケとツツコミが発動するので、全然話が進まないですね。

何時間かけて聞いた内容をまとめてみると、まず艦娘は補給さえ

受ければ基本的に食事不要、ただし味覚はあるし食事そのものは可能であるとの事。食べた物は体内で燃料に変換されて蓄積されるとの事。これってつまり補給ってことかな？

次に睡眠は、人間と同じように必要で疲労も溜まる。ゲームでも疲労はあつたし、まあ当然だよな。

で、身体能力はというと艦装装着時はそれぞれの艦相応の性能を發揮するけど、非装着時は人間よりちよつと高い程度：らしい。鍛錬しだいで能力を伸ばせるって言うから、かなり人間に近いみたい。とある鎮守府には、陸の上でもぶつ飛んだ力を發揮する艦娘も居るらしい。

そして、自分は何なのかだけど、汐風っていう艦って言われました。汐風？って聞き返したところ、峯風型駆逐艦の8番艦との事。そこまで聞いたところで、なんと軍艦の汐風の記憶が頭の中に浮かんできたんです！

初めて艦装を着け、自分を認識する事で過去の記憶がリンクするらしいです。どういう仕組みなのかな。

兵装はというと12cm単装砲と53.3cm連装魚雷、6.5m単装機銃に1号爆雷。

あれ？装備スロット4つもある？

駆逐艦の兵装スロットって確か最初は2つじゃなかったっけ・・・  
気にしたら負けですかね？

改になったら5スロになったりするのかなあ・・・

もしそうだとしたら、ちよつと嬉しいかも。

そんなこんなで、説明を受けたあとちよつと海に出て妖精さんに教わりながら練習してみた。

だって怖いじゃん？いきなり艦娘になりました、はい敵が来ました：とか、轟沈する未来しか見えません。

結果は・・・ええ、何処ぞの特型と同じ結末だったとか口が裂けても言えません。

最高速力39ノットって、D型タービン積んだ駆逐艦とほぼ同じじゃないですか。

それにしても疲れました…。

幸い浜辺からちよつと奥に行つたところに小屋があつたので、そこで眠ることにしましょう。妖精さん曰くこの辺に深海棲艦は居ないみたいですし、野宿よりましですもんね。

あ、窓から見える夕日が綺麗…。

そういえばご飯…もう無理、明日で…いいで…す…よね…

ここは無人島？

妖精達にさんざん振り回された上に慣れない艦娘の身体で練習を重ねるもはや疲労の局地にあった私は、小屋に入るなり手近な壁にもたれかかる様にしてそのまま意識を手放した。

あれからの程度時間が経ったのだろうか。瞼に焼きつくような強い光で目を覚ました。

「……まぶしい？」

小屋に入ったときには気づかなかったのだが、丁度東向きの窓があったらしく朝日が差し込んでいた為、日の光が直接顔に当たっていた。

「あ、そっか、昨日はあのまま……。」

誰に言うでもなく、つぶやく。

そう、昨日は驚きの連続だった。

目が覚めたら浜辺に居るし、ゲームの存在だと思ってた妖精さんに遭遇（というよりは起こされた）するし、二次創作でだけありうると思ってた艦娘に自分になってるし、妖精さんは可愛いんだけど結構ハチャメチャだし、せっかくなので妖精さんに教わりながら航行やら砲雷撃の練習してみれば、結果は散々艦装に振り回されていい所無し。ホント、よくもまあ一日頑張ったものだと自分を褒めてあげたいです。

ぐく……。

そういえば……と思い出した。

どんな時でも身体は正直である。

昨日は結局、何も口にしていなかったのですから。

「お腹空いたな、食べるもの探さないと。」

とその時、へちよつと頭の上になにか落ちてきた。

「うわっ、何?。」

思わず反射的に手を伸ばすと、むにゅつとした感触。

そこには昨日の妖精さんがいた。

「おはようございますー」



わらわらと他の妖精さん達も集まってきて、各々勝手に口を開き始める。

「このしまあんまりひろくないですねー」

「ごはんたべたいですー」

「いずみがあつたですよー」

「はたらかざるものくうべからずですー」

どうやら、私が寝ている間に島を見回ってくれたみたいです。

「そうね、お腹も空いてるしご飯食べたいけど、その前に泉まで案内お願いできますか？水浴びしたいので」

「おやすいごようですー」

「そうときまればぜんはいそげですー」

「しおかぜさんのやわはだ（ウへへ）」

「すぱいらるきいいいっく!!」

「ぎやばんっ」

最早おなじみになりつつあるこのやり取りに苦笑する。

そろそろ妖精さん達をなだめて案内を頼むことにしましょう。

「あはは、程々にして、そろそろ案内お願いしますね？」

「「らじやっ」」

妖精さん達を頭と肩の上に乗せると、痛んでるけどしつかりした作りの扉を開けて歩き出す。

改めて見回してみると砂浜はそれほど大きくなく、真っ白に見えるくらい綺麗だった。

浜から少し奥まった所に小屋はあり、小屋そのものは人一人住むには十分すぎる大きさがあるように見える。おそらく寝てしまった部屋以外にも部屋があるのでしよう。

落ち着いたら小屋も掃除したほうがいいかな、多分これからも暮らすことになるんだし・・・

小屋の後ろには小さな山があるとところを見ると、ここはそれなりに大きさはありそうですね。妖精さん達はしきりに森の方を指差しているところを見ると、泉も森の中にあるのでしようね、きつと。

森に近づいていくと、門のような物がありそこから森の中に道が続

いているのが見える。

門は丸太を立てただけの簡単なもので、森へと続く道はところどころ欠けたところがあるものの、石畳の道になっていた。

薄々は感じてましたが、やはりこの島には以前に人が住んでいた事があるようです。獣道を歩かなくていいのは、本当にありがたいです。

過去の住人に感謝をしつつ森の中へと歩みを進めると、それほど進まないうちに森が少し開けた広場のような所に出た。広場の中央には石組みで出来た水溜りがあり、淵からあふれ出した水が外へと流れ出しているのが見える。よく見るとあふれた水は細い水路を通じてどこかへ流れていつているようだった。

「つぎましたよー」

頭の上に乗せていた妖精さんがここが目的地だと教えてくれました。

確かに、これなら十分水浴びも出来ますし見た感じ綺麗なので飲むことも出来そうですね。

近づいてそつと水溜りに手を差し入れると、少しひんやりしてはいるがそれほど冷たくも無かったので、少しほつとした。

ふと思いついて水面をじつと見てみると、一人の少女の姿がそこに映っていた。

少し切れ長だけどぱつちりと開いた目、余り大きくなくすつと通った鼻筋、桜の花びらを連想させるような唇。少し茶色がかった黒いストレートの髪は背中までの長さがあり、それを水色のリボンでひとつに纏めてある。100人に容姿を問えば120人が美少女と答えるに違いない。

改めて、自分が艦娘になったんだという実感が少しずつ湧いてきた。

ゆつくりと服を脱ぎ手にとってまじまじと確認してみると、やっぱりというか結構汚れが目立ってしまった。

紺を基調としたセーラー服のあちこちが白っぽく煤けていたり、シミのようになっていく所まである。

昨日あれだけ動き回った挙句、掃除もしてない床で寝てしまったのですからしょうがないですね。

と軽いため息をつく、着てる物もついでに洗ってしまえばいいかと思いつく。

幸い今は暖かいですし、洗った後水を切って着ていればじきに乾くでしょうし。

それに、さつきから妖精さん達が静かなのが気になりますね。あれだけ騒々しかったのにいったい何を・・・。

と、視線をめぐらせてみると、広場の端っこの方でどたばたやつてるのが見える。どうやら、水浴びしている私を見ようとした一人を他の全員で阻止しようとしているようだ。

本日二度目の苦笑をもらしつつ、さつきと終わらせてしまいましょう、と水浴びと洗濯を同時進行でやることにした私であった。

横目でちらりと見ると、既に縄でぐるぐる巻きにされていますしね。